はそれぞれ違うが、どの短編にも共通して言えるテーマは「いじめ」である。

ニュースや新聞などのマスコミが、いじめによる子どもの自殺を取り扱うようになったのは、いつ頃からであったろうか。自殺の他にも、中高生が親を刺したり、友達を刺した等の殺人や傷害事件、遊ぶための金欲しさの恐喝、殴る蹴るといった暴行などの事件が後を絶たず報道されている。数多くの事件が報道される中でも、最近ではいじめが取り扱われることはほとんど無い。報道がされていないから、いじめは少なくなったのか。答えは否だろう。報道がされていなくても、私たちが知らないだけで世間に知られないまま片付けられてしまう事実もあるはずだ。

「ゲーム」と称された遊びの標的になってしまった子どもは、復讐することもできない。だから、死を選ぶ以外に逃げ道はない。この絶望的なゲームはもう社会から消えることはないのだろうか。この作品は、ゲームのように扱われてしまうほどに日常化してしまったいじめを、私たち中高生の視点から手を抜くことなく、とてもリアルに描いている。この作品が、他のいじめを描いた作品と違う点は、いじめをなくすためにどうすればいいかや、なぜいじめが起こるのかなどといった解決策や原因を提示しているわけではない点だ。ただただ、いじめと立ち向かっていく子どもの姿を目を背けずに描いていて、肉体的にも精神的にも追い詰められた姿には、思わず途中で読むのを何度も中断したくなってしまうほどだ。

「いじめ」と聞くと、私は今までいじめる側がすべて悪いものだと思っていた。どんな理由であれ、いじめは決して許してはいけない行為だ。いじめられた子どもは精神的にひどく傷つき、生涯消えることのない傷を心に残してしまうと思うからだ。その答えは、この作品を読んだ今でも変わってはいない。しかし、いじめはいじめている側の心の訴えだと受け取ることもできると思う。この五編の作品の中からあげるとしたら、『エビスくん』だ。複雑な家庭環境と慣れない土地の中で、エビスくんはひろしを「いじめる」ことで、コミュニケーションをはかるしかなかった。決していじめの内容は許せるものではなかったが、不器用で実は優しいエビスくんの人柄がなんとも微笑ましく感じてしまう。

また、他に「いじめ」る原因として、そのような形でしかストレスを発散できなかったのではないかと私は考えた。そのような子どもたちの背景には、高学歴化してしまった社会に則った勉強三昧の日々や、不景気による親の共働きなどで親とのコミュニケーションがとれず、話を聞いてもらえないまま、不満やストレスをぶつける場所がないなどといったものがあるのではないだろうか。その不満を誰かにぶつけなくては自分を保つことができず、それをぶつける場所として、「いじめ」という形で現れてしまったのではないかと、私は思う。

今までは、いじめた子どもにばかり責任を押しつけ、私達はその現実から目をそらしてしまっていたように思う。しかし、いじめなければいけなくなってしまう環境を作り上げたのは私達だ。私達はこれから、いじめを当たり前のものだと片付けてしまわないで、きちんと正面から向き合わなくてはいけない。そうしなければ、いじめはこの先決して消えることはないだろう。いじめるという行為は決して許してはいけない。いじめられた心に消えない傷を作ってしまうからだ。しかし、いじめる側に決してすべての責任があるわけではない。この二点はとても矛盾していることだとは思うが、この作品を読んで、いじめられる側といじめる側の心情が伝わってきて強くそう感じた。この現実を多くの人が受け止め、理解してもらうためにも、私達中高生はもちろん、子どもを持っている親や大人などもっと多くの人にこの本を読んでもらいたいと思った。私達がこうしていつも通りに暮らしている間にも、いじめる子どもは自分の心と葛藤し、いじめられている子どもは独りで強く戦っているのだから。